

ドツキネーシヨル
南神村の寺でラカールはじめとする信者たちと共に

ドツキネーシヨル
南神村の寺院でラカール、ラーム、ケダルたちと共に——ヴェーダーンタ派サードッの修行者とブラフマン智についての対話

一八八三年十二月二十九日(土)

タクル、聖ラーマクリシュナは馬車に乗っておられる。カーリーガートを見に行かれるのだ。アダル・セン氏の家に寄って、そこから行かれるのである。アダルがお伴をするはずだ。今日は土曜日で新月の日、一八八三年十二月二十九日。時間は午後一時ごろ。

馬車はタクルの部屋の北側に停まっている。

モニ校長が馬車の入口のところ立っていた。

モニ「あのう、私も行ってよろしいでしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「どうして?」

モニ「カルカッタの住居いえに行きたいと思imasuので——」

聖ラーマクリシュナは心配そうなお顔になって——

「行かなけりゃならんのかい？　ここにいればいいよ」

モニは神殿に戻っていった。彼は家に何時間か行ってくるだけのつもりだったが、タクールは不賛成だった。

一八八三年十二月三十日（日）

日曜日、一八八三年十二月三十日、ポウシユ白分^{ついで}一日。午後三時ころ。モニが一人で木立ちの下を歩いていると一人の信者が来て、「主^{ブラ}が呼びです」と言った。お部屋に行くとタクールは信者たちと坐っておられる。モニはあいさつ^{プラナーム}をしてから信者たちと床の上に乗った。

カルカッタからラームやケダルたちが来ていた。彼等と共に一人のヴェーダーンタ派の修行者が来ている。タクールが先日、ラームの別荘を見に行かれた時お会いになった、あの修行者である。その人はあの日、別荘のわきにあるベンチに一人で腰掛けていた。ラームはタクールの言い付け通り、今日、その人を連れて来たのである。修行者もタクールに会いたがっていた。

タクールはこの修行者と楽しそうに対話をしていらっしやる。ご自分の近くの小さな板台に彼を坐らせて、ヒンディー語で話しておられる。

聖ラーマクリシュナ「こういうものを、あなたはどうか考えていらっしやる？」
ヴェーダーンタ派の修行者「そんなものは皆、夢ですよ」

聖ラーマクリシュナ「ブラフマンのみ実在、世界は虚偽錯覚というわけ？　なるほどね、ジー。では、ブラフマンはどんなものですか？」

修行者「音がブラフマンです。完全無欠な音です」(アナハタの音、オームのこと)

聖ラーマクリシュナ「でも、ジー、その音には何か定理があるはず、いかが？」

修行者「表現あらわされるものが、表現あらわすするものです」(原典註)

この言葉をお聞きになると、タクルは三昧に入られた。不動の姿勢——絵のなかの人物のように坐っていらつしやる。修行者も、信者たちと驚嘆してこの三昧境を眺めている。ケダルがこの修行者に説明した——

「見たでしょう、ジー！　これが三昧と言われているものですよ」

修行者は三昧について書物で読んだことはあるが、いままで実際に見たことはなかった。

タクルは少しづつ平常もとに戻られて宇宙の大実母と話をなさる。——「マー、なおしておくれ。この世の意識を残しておいてくれ。——この人とサッチダーナンダの話がしたい！　マー、サッチダーナンダの話をしたい！」

修行者は驚嘆のあまり、口もきけずに見つめながら話を聞いていた。やがて又、タクルは修行者と話をはじめられた。こうおつしやる——「今は、我ワは彼ハムなりムを通り超こしなさいよ。今は、ワタシとアナタ——楽しいね！」

私とあなたがある間はマーもいらつしやる。マーのところでは楽しく過ごそう——こういうことをタ

クールはおっしゃったのだろうか？

しばらく話をなさってから、タクールは五聖樹パンチャパテイの柱に散歩に行かれた。お伴はラーム、ケダル、校長、その他。

〔聖ラーマクリシュナのケダルに対する教訓——世間を捨てることについて〕
聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ。あの修行者のこと、どう思った？」

ケダル「無味乾燥な智識ですね！ 鍋は火にかけられたばかりで、まだ中に米が入っていない！」
聖ラーマクリシュナ「そりゃそうに違いないが、でもあの人は俗世を捨離すてているよ。俗世を捨離した人は、それだけでもたいへんな進歩なんだよ。

あの修行者は初心者アラウアルタカの段階だ。あの御方をつかまないうちは、何ごともまだまだだよ。あの御方の愛に酔うようになれば、もう他には何の関心もなくなる。そのときは——

胸に抱いた 大事な宝たから玉
いとしい母さま シャーマを見るのは

〔原典註〕至高なる神よ。あなたは表す者として知られ、また表される物として知られる。

—— アディヤートマ・ラーマーヤナ ——

1883年12月30日(日)

心よ お前と私だけ

ほかの誰にも見えぬもの

欲の惑^{まど}わし さらりとすてて

ひとり 清らかな心で見よう

でも 舌だけは残しておいて

ときどき甘えて マー、マーと呼ぼう

いやな臭いや 味するものは

そばに決して寄せつけぬよう

智慧の眼 いつも光らせて

油断をせずに 気をつけていよう

タクルの気分に共鳴して、ケダルも一つ歌った――

心のたけを語ろうにも、友よ

それはタブーになっている

やさしい同情がないならば

命の炎は消えるだけ

タクールは自室にお戻りになった。四時を打ったところである。大実母カーリーのお堂の扉が開いた。タクールは修行者を伴って大実母カーリーのお堂に行かれた。モニもついて行った。

カーリー殿に入ると、タクールは愛情込めてマーを拝まれた。修行者も掌を合わせて頭を下げ、大実母を何度も何度も礼拝した。

聖ラーマクリシュナ「マーを拝して、ジー、どうだった！」

修行者は信愛バクテを持って「カーリーが第一であります」

聖ラーマクリシュナ「カーリーとブラフマンは不異おなじです。どうですか、ジー？」

修行者「外を向いている間はカーリーを認めなければなりません。外を向いている間は善と悪があり、好むものと嫌い遠ざけるものがあります。名と形はすべて虚妄というものの、私が外を向いている間は女性を退しりぞけます。目的を達成するためには善をとり、悪を遠ざけます。さもなければ、道を外すであります」

タクールは修行者と話をしながら部屋に戻られた。

聖ラーマクリシュナ「モニに向かって」見たろう、あの修行者はカーリーを拝みなすったよ！」

モニ「ほんとうに、そうでした」

一八八三年十二月三十一日(月)

翌日、月曜日、一八八三年十二月三十一日。午後四時ころ、タクールは信者たちと部屋に坐つておられる。バララーム、モニ、ラカール、ラトウ、ハリシユたちがいる。タクールはモニやバララームに向かつておっしゃる――

〔口だけの智慧――ハラダリにタクールが叱つたことば〕

聖ラーマクリシユナ「ハラダリには智者くさいところがあつてね。アデイヤートマ(ラーマヤナ)だのウパニシャッドだの、一日中読んでいたよ。形ある神の話がでると、さも軽蔑したような顔付きをするんだ。いつかわたしが、貧しい人たちが食べてる葉の皿からチヨイチヨイツまんて食べていたら、こう言つた――『あんた、そんなことをして、息子に嫁の来手がなくなりますよ!』わたしは言つてやったよ――『つまらんことを言うやつだ。わたしに息子ができるはずがないだろう! お前のギーターやヴェーダーンタなぞ読む口なんか、オシになつてしまえ!』考えてもみる、片方でこの世は間違いだなんて言つてるくせに、片方ではヴィシユヌ殿で鼻を天井に向けて座禪なぞしている!」

日が暮れた。バララームたちはカルカッタへ帰つた。部屋ではタクールがマーを瞑想していらつしやる。間もなく神殿の方から献灯アキラのやさしい鈴の音が聞こえてきた。

夜も八時になった。タクールは半三昧の境地で、美しい声に節をつけて大実母^マと話をしておられる。モニは床に坐っている。

〔聖ラーマクリシユナとヴェーダーンタ〕

タクールは、「ハリ、オーム。ハリ、オーム。ハリ、オーム！」と甘い御名を唱えてから大実母^マに向かい、「オー、マー！ ブラフマンの智識をよこして無感覚にしないでおくれ！ ブラフマン智は知らないよ、マー！ わたしは喜んでいたいよ！ 楽しく遊んでいたいよ！」

それからまた——「ヴェーダーンタなぞ知らないよ、マー！ 知りたくもないよ、マー！ お前を知ったら、ヴェーダもヴェーダーンタも、どんなに下の方に落ちることか！」

「クリシユナ坊や！ お前に言おう。さアお食べ、さアお取り、坊や！ クリシユナ坊や！ わたしは言うよ、お前はわたしのために肉体^{からだ}をまとって来てくれた。わたしの息子のクリシユナ坊や」